

## 随想

# 隣国と関わる話題 ——鳥のこと、百済のこと——

式 正 英

此处で隣国とは韓国又は朝鮮半島のことである。お茶の水女子大学を退官して以後三回韓国を訪ねる機会があった。日韓両国は地理的歴史的に緊密な関係にありながら、親しみ難い距離を感じるのは何故なのであろうかと疑念が去らないままに往復していたが、旅する毎に親しさを増し、越え難いと想っていた距離も次第に縮まって来た想いになった。やはり近縁な関連の持つ意味を確認していく操作が前提として必要なのだと思い、その話題に触れてみることにしたい。

韓国語と日本語は語順や文法が似ていると言われながら、一寸聞いただけでは全く通じない。御神輿を担いで「ワッショイ、ワッショイ」は韓国語のワッソ、ワッソ（来ました、来ました）から伝来したと言われる。また最初からの意味で「ハナから・・」と使う場合は、韓国語の「ハナ」は「一」だから、それに由来したに違いないと言う。そう言えば昔から童謡が遊びの時に謡う「勝って嬉しいハナ一匁」「負けて悔しいハナ一匁」に出てくるハナも「先ず」の意か「一」を重ねて使っている意味で韓国から伝来したかと思えて来るのである。

日本の国語辞典の中にもこの語は韓国語に語源を持つと書かれた記述に出会う場合がある。鳥のカササギの項には慶尚南道、慶尚北道でカンチェギと呼ぶ鳥の名からカササギの名が由来したと記してある。カササギは佐賀平野を中心とする北九州にしか分布しない鳥で天然記念物に指定されていることも気になるが、朝鮮烏、高麗烏、カチガラスとも呼ばれている鳥である。漆黒の鳥に似てはいるが少し小型で、肩羽と腹面が白色な点が烏と異なっている。

2000年夏、国際地理学会議開催の時期に合わせてソウルを訪問していた間のことである。連日好天の猛暑であったが一日日本語の判るガイド、キム・ヤンスク青年の案内でソウル市街の名所や郊外の水原市近くに遊んだ。ソウルが東京と同様

規模の大都会で清潔さも保っている様子なので、ゴミ対策や環境問題を話題にしていた訳でもなかったが「東京の街はカラスの被害に会って大変そうですね。この間テレビで見ました。韓国にはカラスはいないので。カラスは動物園でしかみられません」と同青年が突然言いだした。

韓国にカラスが居ないとは普段意識していなかった事柄だっただけに、ハテ何のことだろうと一瞬戸惑いを感じた。米国人の詩にも大鴉を題にしたものがあるのを思い出して、カラスは何処にでもいると錯覚していた様でもある。そう言われてみればソウルの街角には生ゴミを詰めたビニール袋の乱雑な堆積も見られなければ、ましてやそれ等をつついて際限なく汚れた有様になる東京で好く見掛ける光景も見当らなかった。ソウルでのゴミ処理がどう行われているかその時は関心が及ばなかったが、今思い出して見ると昔の日本で門毎に置かれていた四角い黒塗りのゴミ箱と同じ様なものが、今のソウルの道端で見られていたかなと覚えている。

それにしても日本なら何処にでもいるカラスを韓国では確かに見掛けることは無かった。日本なら誰でもが熟知の様に街中にも村外れにもカラスが群がっている様を見るのは今更のことではない。ハシブトガラス、ハシボソガラスが主な種類であり、近くの森に営巣して集団で棲み付いている。日本人の生活が飽食になり始めたここ数年以前から、街の中でカラスの行動が積極的に目立つ様になり、次第に跳梁跋扈してゴミの集積を食い散らかし、傍若無人になって時には人をも襲うカラス公害にまで発展した。こうした状況が決して誇張ではなく最近の日常の出来事だから都市居住者なら誰しも首肯できるだろう。カラス防止用の網をゴミ袋に被せる方法でやっと撃退する目途が立つ様になって、つい最近カラスの勢いが殺がれて来たとも思えるのだが、本当に効き目があったかどうかはもう少ししないと判らない。

1990年の夏、北海道北端の西にある利尻島に旅行した折、鶯泊港に近い利尻富士北西側山麓の原野にカラスの大群が群れているのを見掛けた。森林からは離れた草原の中に、北国特有の鈍色の空の下で黒い大型のカラス群が飛び動いている異様さは真に印象的であった。この場合はワタリガラスと言う種類であり、本来冬に北海道北東部迄渡って来るものが一部留鳥となって利尻島には年中いると言われている。この時は森や市街地でない所でカラスの群に出会った奇異な感じが残った。20年程前、青森県むつ市の郊外にあるお寺の民宿に行った時も近くの森に夕暮れになってカラスの大群が群れ集まる光景に接して異様に感じた思い出がある。併しこの異様さはカラス本来の鳴き声や行動や黒色の羽色や体型から醸し出される雰囲気重なって不吉さを人へ感じさせるのであり、夕方森の畔に帰ると言う童謡にも謡われているカラスの日常の習性が演ぜられているだけのことである。

そうした日本では卑近な存在であるカラスが韓国にはいないとは却って不思議に思われるが、東アジアの鳥類の分布を論ずる動物地理学上の問題としてもよい程の意義を持つと考えてもよからう。戦前から戦中にかけてソウルに暮らした人によると、当時韓国でカラスはカササギのことを言っていた。逆にカササギは元々日本には居なかった鳥である。16世紀の頃からカササギが日本に渡来したとあるから、多分文禄、慶長の役に頃に朝鮮半島から人の手により移入されたとしても好からう。いわゆる秀吉の朝鮮征伐で多くの陶工達をその家族と共に伊万里や鹿児島に連れ帰ったことがはっきりしているから、その折にカササギを伴ったとしても不自然とは考えられない。とも角その頃から佐賀平野とその周縁にカササギが棲み着いている。つまり本来カササギは朝鮮半島に棲息するものの日本にはいなかったが、カラスは日本に棲息し朝鮮半島にはいないと言う風に棲み分けていた訳である。

ミヤマガラスと言う種類のカラスは動物図鑑<sup>2)</sup>によると、冬朝鮮から北九州、本州西部、四国に渡って来るとされるが、通常的生活空間に馴染みのある存在ではない。カササギは集落近くの高い木立に営巣する等ハシボソガラスなどの生態に類似したものがあると思われるが、日本のカラスの様に公害を撒き散らす様な行動をとると言った評

判は聞こえて来ない。カササギもカラスも世界的には各地に分布している鳥ではあるが、隣り合う韓国と日本とだけに限定してみると、歴史的に幾度とない交流がありながら鳥類の分布の上で微妙な差異が存在していることに気付く。日本人の生活舞台には肇国の伝説に登場するヤタガラス以来カラスのいない環境は考えられないだけに興味深い。

肇国に絡まる話かどうかとは別に以前から何故「百済」と書いて「くだら」と読むのであろうか気になっていた。新羅を「しらぎ」、高句麗を「こうくり」と言う方が未だ漢字の音をなぞって発音していると直感できる。韓国語でも新羅は「シラ」、高句麗は「コクリョ」として発音する様であり日本での呼び方と直接繋がりが有ると理解される。ところが百済は韓国では「ペクチュ」と漢字の韓国読みで発音し「クダラ」とは決して言わない。ペクチュはシラ、コクリョと同じレベルの発音と言えらるだろう。併しクダラは漢字の読みでないとする、何を根拠に百済の読みとして通用しているのであろう。

奈良県法隆寺の秘仏の百済観音も近くの百済川も百済寺も、百済と出て来ると当然「くだら」と読むのだが、考えて見ると学校の教育の中でそう覚え込まされて来た様に思う。韓国語の読みにも無いのに、日本で何故クダラなのか、著しく疑問を感じて周囲の人に誰彼となく尋ねてみるのだが、明快な解答に接する事のない儘で推移していた。相手によっては「クダラない話しだ」と茶化されてしまう。

1999年9月にJR九州が企画した百済文化を訪ねる旅のツアーに参加した折に、始めてこの問題の解決の緒が見付かった。扶余在住の歴史家イ・ソクホ(李夕湖)氏の懇切な案内で公州の城跡、武寧王陵、扶余の阜蘭寺や定林寺跡、白馬江や各歴史博物館を廻ることができたのだが、その間を通して李先生は71歳ながら達者な日本語で能弁に大声で説明にあたられた。そこで筆者は合間を見てクダラの語の由来に付いてどんな考えをお持ちか先生に直接質問を向けてみた。

李先生はこの質問に一寸驚かれた風に見えたが、「後で時間を見付けて皆さんに話す形でお答えします」と応じられた。他に見学したり種々話題が変わったりする内に三時間位は経過してしまい、もう忘れられてしまわれたかと半ば諦めそうにな

った頃、流石に頭の冴えておられる先生だと合点できる程、きちんとした形で話しを始められた。多分本質的に意味深い事柄なので、先生の頭の中で整理する時間を掛ける必要があったのだろうと想像した。以前この話題は東京で國學院大学の学生さんを相手にした講演会で纏まった話としてされた事があるとも言われた。

クダラは元々韓国語のクン・ナラと言う語から由来したのだと考えられる。クンは「大きい」と言った意味の形容詞であり、例えばクナボジはクン・アボジが連結したもので、大きいおじさんつまり父方の伯父さんの意味で用いられる。ナラは国（くに）の意味の韓国語である。そう言えば奈良県の奈良は韓国語のナラ（国家）から由来したか楽浪郡から由来したと書いたもの<sup>3)</sup>を見た事がある。ナラは当然古代国家の規模であるから「くに」と言っても郷里や故郷に近い概念にも通じる様な規模と考えてもよかろう。クン・ナラから転訛したか連結した結果のクダラはつまり「大きい国」「本家の国」「もとのくに」と言ったニュアンスを持つ意味となるだろう。李先生の話をも補足しながら大要を記すと以上の様になる。

クダラと言う読みが日本でしか通用していない事に深い意味が潜んでいる様に思われる。つまり百済と書いて漢字の発音に沿ってその儘読むベクチュと韓国での発音をとらずに、「大きな国」と

か「もとのくに」「本家の国」と言った読み方をするのは、いわば主観的な読み又は第一人称的な読みをしていると言ってよい。飛鳥時代、大和朝廷が次第に国の体裁を整えようとして行く時期に、中国大陸や朝鮮半島から多数の帰化人が渡来したと言う史実は既に明らかにされている。当時の新羅、百済、高句麗から渡って来た人々によって多様な高度の文化がもたらされた。その中で日本の国や文化の形成の主流になっていたものは何処かと言えば、やはり百済になるのではないかと思える史実をいくつも挙げられる様に思う。その考えを支える有力な証拠の一つは百済をクダラと呼ぶ読み方をして憚らない私共の日常そのものである。(2001年1月25日)

#### 参考文献

- 1) 渡辺吉鎔・鈴木孝夫：朝鮮語のすすめ 1981年 205P. 講談社
- 2) 小林桂助：標準原色図鑑全集 第5巻 鳥 1967年 173P. 保育社
- 3) 吉崎正松：都道府県名と国名の起源 1985年 169P. 古今書院

---

しき・まさひで  
お茶の水女子大学 名誉教授